

キャラクター名	プレイヤー名
無答 零 (ムトウ レイ)	

シンドローム	ノイマン		ワークス	レネガイドビーイングC	カヴァー	暗殺者？
	ノイマン					
オプション			年齢	24	性別	男
覚醒	渴望	衝動	妄想	初期侵食率	38	%
出自	疎まれた子	経験	心の壁	邂逅	秘密	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	35
肉体	0	0	1		2	3	行動値	15
感覚	0	0	1		2	3	(非装備時)	15
精神	6	1	0		2	9	戦闘移動	20
社会	2	0	0		2	4	全力移動	40

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃	5		RC	1		交渉	1	
回避			知覚	1		意志	2		調達	1	
運転:			芸術:			知識:	2		情報: UGN	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
ポルトアクションライフル	射撃	9r+5		8		マイナーアクションに使用で達成値+5・同エンゲージ内使用不可
ポルトアクションライフル	射撃	16r+5		23		60%まで C値8 武器使用で+5 零距离射撃使用でダイス+3
ポルトアクションライフル	射撃	15r+5		23		60%以上 C値8 武器使用で+5 零距离射撃使用でダイス+3
ポルトアクションライフル	射撃	18r+5		23		80%以上 C値8 武器使用で+5 零距离射撃使用でダイス+3

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品		合計装甲:	0	合計回避:	0
ポルトアクションライフル		ロイス			
コネ: 情報屋		対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ
コネ: ハッカー		Dロイス: 達人	P	N	消費
コネ: UGN幹部		マルドゥク	P 好奇心	N 脅威	
コネ: 要人への貸し		[Dロイス] 叶えし者: マルドゥク	P	N	
ウェポンケース		[Dロイス] 叶えし者: マルドゥク2	P	N	
			P	N	
			P	N	
			P	N	
		最大財産P:	20	残り財産P:	5

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果:	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果:	コスト分のHPで復活							
コンセントレイト:ノイマン	2	2	メジャー			シンドローム		
効果:	組み合わせた判定のクリティカル値-LV							
コントロールソート	1	2	メジャー	武器		対決		
効果:	射撃を「精神」で行える							
ブラックマーケット	1		常時	至近	自身			
効果:	常備化ポイント+LV×10 基本浸食値+2							
コンバットシステム	4	3	メジャー			対決		
効果:	射撃のダイス+LV+1							
急所狙い	7	4	メジャー	武器		対決		
効果:	攻撃力を+LV×2する (浸食値Dロイスの効果で+2)							
零距离射撃	3	2	メジャー	至近		対決		
効果:	射撃のダイス+LV 射程: 至近になる							
ヒューマンズネイバー	1		常時	至近	自身	自動	R B	
効果:	衝動判定+LV 基本侵食率+5							
オリジン:ヒューマン	1	2	マイナー	至近	自身	自動	R B	
効果:	シーン間達成値+LV							
生き字引	3	2	メジャー	至近	自身			
効果:	全ての情報: の代わりに[意志]判定 ダイス+LV							
ラストアクション	1	5	オート	至近	自身	自動	100	
効果:	戦闘不能になった瞬間、メインプロセスを行える、シナリオ1回							
代謝制御	★		常時	至近	自身	自動		
効果:	感情制御							
完全演技	★		メジャー	至近	自身	自動		
効果:	仕事を受ける時毎回声色を変えている							
ドクタードリトル	★		常時	至近	自身	自動		
効果:	新しい仕事の関係で色々な言葉を覚えた							

一人称: 僕 二人称: 君 口調: 冷めている カヴァーが研究者なので基本白衣を着ている 大学生に見られるのがコンプレックス

もともとは人並みなことすらできない凡人以下の人間だった。それに加え、目の色も親戚の誰とも違う色だったことから、物心着いた時から前髪で目を隠すようになった。そんな彼とは対照的ななんでもできる完ぺきな弟がいたため、親戚一同からは「できそこない」と言われていた。小学校時代にあったいじめと優秀な弟ばかり構う両親のせいで、彼から感情が消えていった。どんどん卑屈になっていく彼だったが、唯一弟だけが彼を他の人と対等に接してくれた。だが、その弟も「自分の株をあげるためにやっている」と、彼が十歳になる少し前の時弟とその友達と話しているのを聞いた。最初は聞き間違いかと思ったが、その後彼が両親やクラスメイトに浴びされる罵詈雑言を弟が言っているのを聞き、夢ではないとわかる。それから、表情はいつもの通り造り上げ、心の底では人を信じれなくなった。そして、彼の十歳の誕生日の日、弟をだまし、掃り道に少し遠回りをして人気はあまりないが交通量の多い道路の信号待ちの時、彼は-----弟の背中を押した。後悔は不思議となかった。それよりも彼の心を占めていたのは、今までに感じたことのない「不思議な高揚」だった。野次馬が大勢集まる前に彼は、人の寄り付かない廃ビルへと向かい、屋上から身を投げた-----恍惚を顔に浮かべながら。

彼が目覚めたのはUGN管轄の病院だった。彼が「自殺」をしてから数日が立っていた。そこで彼はこの世界の「裏側」を知ることになる。しかし、彼は「それ」を聞いても表情一つ変えることはなかった。彼は終始無言のままだった。彼にとって重要なことは「弟」を殺せたかどうかなのだ。「そいつら」が病室から出て行った瞬間、彼は病室にあった新聞を漁り、目当ての記事を見つけた。弟の名前、そしてその名前の少年が「交通事故」で死んだという記事だ。場所も「彼」が弟の背中を押した場所だ。彼は確信した。弟は、いや「アイツ」は死んだのだ、彼が背中を押したことが原因で。それと同時に喪失感に襲われた。これから何をすればいいのかわからない。表の世界に戻れないのなら、「そいつら」のいう組織に入るしかない。